

「内容重視の批判的言語教育(CCBI)」の理論と実践：  
初級日本語の文字プロジェクト  
“CRITICAL CONTENT-BASED LANGUAGE INSTRUCTION”: JAPANESE  
ORTHOGRAPHY PROJECT

佐藤慎司  
Shinji Sato

ロチャー松井恭子  
Kyoko Matsui Loetscher

コロンビア大学  
Columbia University

## 1. はじめに

内容重視の言語教育(CBI)の重要性が唱えられて久しいが、CBIの生まれた背景とその教育理念、また、現在実施されている内容重視の言語教育の問題点などを総合的に検討しているものは少ない。したがって、本稿では、まず、CBIの生まれた背景とその定義、そして、言語と内容を統合することの意義をもう一度見直す。そして、そこから見えてくる教育理念は、自律した生涯学習者を育てるため、初期の段階から学習者自身が自分で考え、その内容に責任を持って外へ伝えて行く力の育成であることを確認する。本稿では、そのような教育理念を強調するCBIを内容重視の批判的言語教育(CCBI)と呼び、CCBIを取り込んだ実践例の一つとして「日本語の文字プロジェクト」を報告する。

## 2. 内容重視の外国語教育<sup>i</sup>

### 2-1. 内容重視の外国語教育が生まれた背景

内容重視の考えが教授法の大きな動きとして注目を集めるようになったのは1970年代に入ってからであった(Brinton, Snow, & Wesche, 1989)。当時、カナダでは、第二言語学習と教科学習を同時に進める必然性が生じており、イギリスでも全ての教科において言語(英語)を重視しようとする動きが始まっていた。つまり、CBIは学校における教科教育と言語教育の統合から始まったわけである。そして、同じ時期に外国語教育においてもコミュニケーションアプローチが台頭し、意味のある言語使用、コミュニケーションの手段としての言語という考えが受け入れられ始めた。その後、社会構造の変化による学習ニーズの多様化、外国語教授法自体の変化に対応するように、CBIの形も変容し、現在でもCBIは社会的・個人的ニーズに合わせ、さらに変化を続けている。つまり、現在に至るまでのCBIの発展にはそれぞれの時代や環境における実用性・現実性への志向が大きく関与していると言える。

### 2-2. CBIの定義<sup>ii</sup>と教育理念

内容重視の言語教育の定義は、言語のクラスと内容のクラスを統合するという比較的わかりやすいものである。例えば「ある特定の内容と言語教育の目的とを

統合することである。より正確に言えば私たちは高等教育に従事しているので、大学の科目と第二外国語のスキルを同時に教えることを指している。(中略) 学生のフォーカスは第二外国語を通して情報を得、そして、その過程でアカデミックな言語スキルを伸ばすことである。究極的な目的は、学生がそれらのスキルを特定の第二外国語で他の科目にも応用できるようになることである(Brinton, Snow, & Wesche 1989)。「内容重視の外国語教育は、実際に新しい言語を使用しながら、授業の初日から、コミュニケーションの実際的手段として、その言語を学ぶことを学生に奨励している。さらに内容重視の言語教育の哲学は学生が自律的な学習者になるためのエンパワメントを目標にしている。最終的に、外国語教育の究極的な目的は学習者が羽を広げ、巣を離れ、地平線に向かって高く舞っていくことである(Stryker & Leaver 1997)<sup>iii</sup>」、つまり、自律的な学習者を育てることが目標になっている。

また、内容重視の言語教育では、擬似コミュニケーションやシミュレーションではなく実際のコミュニケーションを体験しながら学習する(Learning by doing) ということを重視している(Stryker & Leaver 1997)。実際のコミュニケーションでは、ことばの使用のされ方・知識は有機的なもの、つまり、常に変化しているものであり、この言語使用・知識が変化しているという事実を、先ほどの内容重視の教育理念、自律的な学習者の育成、学習者のエンパワメントという理念と照らし合わせてみると、次のようなことが言える。ある時点での言語の使用の仕方・知識は、それまでの言語使用・知識の蓄積によって可能になっているが、これからその言語使用・知識がどのように変化して行くかは、人々がその言語使用・知識を、そのまま継承していくか、望ましくないものとして変えていくか、新しいものを模索するかによっている。つまり、言語使用の仕方・知識は人々を拘束するものであるかもしれないが、現在の言語の使用・知識を作ってきたのはそれまでの人々であり、これからの言語の使用法・知識を作っていくのもその人々なのである。

このように考えると、言語教師は、言語使用者として、あるいはその内容に関して学習者が「一人前」になるために、自分が必要だと思われる必要な知識を学習者に提供するだけでなく、これからの自分、社会、コミュニティーの未来(言語使用・知識も含む)にどのように関わっていったらいいのか、学習者とともに考えていくことも大切である。そのためには、自分、社会、コミュニティーの未来に能動的に関わることを考えながら、自分の置かれている現状(言語使用・知識(内容)やそれを取り巻く環境)がどうなっているのかを認識し、その現状を様々な角度から捉え分析すること、つまりクリティカルな姿勢・視点を持つことが大切であると考えられる。

そして、われわれは、このようなクリティカルな姿勢・視点をもつ自律的な生涯学習者を育てるということは、初級文法が終わった後から始めるべきような、いわば、スキルのようなものではなく、初級レベルのクラスでもなされるべき教育理念であると考えている。したがって、本稿では、初期の段階から学習者自身が自分で考え、分析し、その内容に責任を持って外へ伝えて行く力を積極的に育成する内容重視の日本語教育を内容重視の批判的日本語教育(Critical Content-

Based Instruction: CCBI)と呼び、その実践例の一つとして初級日本語の文字プロジェクトを報告する。

### 3. 実践概要：文字プロジェクト

文字プロジェクトは2010年秋学期に、アメリカ東海岸の私立大学、初級日本語クラスのカリキュラムの一部として実施され、日本語1年生全員、77人が参加した。このコースは、一学期15週、65分授業が週4回で、それに話す・聞く練習をするラボワークが週一回（50分）行われた。教科書は「みんなの日本語」で、プロジェクトの行われた秋学期には14課まで進められ、この通常の授業に上乘せされた形でこのプロジェクトが行われた。学習者がこの学期に学習した文法項目は、存在文、授受表現、勧誘文、形容詞／形容動詞の過去形、依頼文などであった。

プロジェクトは次のような目的のもとに、第8週目に始められた。

1. カタカナの様々な使用例を集め、分析・考察する。
2. 様々な用法のカタカナを使用してみる。
3. 教科書にどのようにカタカナに関する説明がなされているかを見る。また、なぜそのような説明がなされているかについて考える。

これは先に述べた、クリティカルな姿勢・視点をもつ自律的な生涯学習者を育てるという教育理念に基づいて掲げられたものである。従来のように教師が教科書を使ってカタカナの使用法を一方向的に教えるのではなく、学習者が自ら考え、比較・分析し、その結果に基づき、実際にカタカナを使用することを目的としている。まず1は、実際のカタカナの使用例を集め、それらを教科書にあるカタカナについての説明と比較し、どの用法にあてはまるか、もしあてはまらないならそれはどんな用法なのかを考えてもらう。なぜカタカナが使用されるのかその理由、効果についての学習者自身の分析を促す。2は、1で調査した使用法を基に、学習者が自分の興味と目的にあわせて、実際にカタカナを創造的に使用してみる。3は、教科書にあることが常に正しいのかといった批判的な考察を促し、それに対しての自らの関わり方を考えてもらうことを目的としている。

上記の目的の下、実際になされた活動の手順は以下の通りである。

1. 日本の文字の歴史について学習する。
2. 複数の日本語初級教科書にあるカタカナ使用法の説明を比較する。
3. 2～3人のグループで、カタカナの実例を本や雑誌、インターネットなどから収集し、それらを使用法によりどのようにカテゴリー化できるか話し合う。またその際、その使用法にどんな目的、効果があるのか、使用者はだれを対象に使用しているのかも考える。
4. 上記のグループで、教科書のカタカナ説明がなぜそのようなになっているのか考察する。
5. 3と4の分析結果を各自がブログ<sup>iv</sup>に公開する。

6. ブログ上で、5についてクラスメート、日本語科 TA、協力校の学生達と意見交換し、それに基づいて、分析を書き直す。
7. カタカナを使って、俳句、川柳、詩、漫画、ショートストーリーなどの文学作品を作るにあたって、その評価カテゴリー<sup>v</sup>を設定する。
8. 7の評価カテゴリーを念頭に置いて、文芸作品を作り、各自のブログに公開する。
9. 8の作品について、クラスメート、日本語科 TA、協力校の学生達とコメントを交換し、それに基づいて作品を作り直す。
10. 7で設定した評価基準に基づいて、クラスメートの作品と自分の作品を評価する。
11. プロジェクト評価を行う。

#### 4. データ分析と考察

次に、実際に学習者が行った分析調査及び文学作品の事例と、プロジェクトに関するアンケートの結果を、内容重視の批判的日本語教育 (CCBI) の理念・目的の観点から分析・考察し、このプロジェクトが、CCBI が提唱するクリティカルな視点・姿勢、現状に能動的に関わろうとする態度や視点をどのように育成していくことができるか、その可能性について考えてみたい。

##### 4-1. 学習者のカタカナ分析調査

###### 事例 1 : ブログ名 Olympus Mons

この学生は以下のように、まず、中華料理店のメニューの中で、漢字で表記される中国語の言葉も、そのまま漢字で表記するのではなく、外来語として発音しカタカナ表記する例を挙げている。

A more interesting use of Katakana is using it for the spelling of modern Chinese words rather than using the Kanji that the Chinese use for these words. Examples include:

Katakana	Kanji	Meaning
マーノヤン	麻雀	Mahjong
ウーロン	烏龍茶	oolong tea
チヤーハン	炒飯	fried rice
チヤーノユー	叉焼	roast pork
ノユーマイ	焼売	a kind of dim sum
ラーメン	拉麵	Chinese-style noodles

そしてその他にも、漫画、広告、雑誌などから使用例を集め、以下のような分析結果をブログに載せている。<sup>vi</sup>

②広告の中で、外来語ではなく、もともとひらがなや漢字で表記される言葉がカタカナで表記されている。これは、読む人の興味を引くための宣伝効果があるのではないか。

③漫画の中では、日本語でも、外国人が話す日本語にみられるアクセントや、アナウンスなどのロボットの発音にも、カタカナが使われている。これは日本語の中で、異質なものを、通常とは異なるものであることを強調する、引用的役割があるのではないか。

④学園ものの漫画の中で、あまり成績が良くなく、なにかといじめにあっている生徒を、「～センセイ」と敬称をつけて呼ぶのにカタカナを用いている。この場合、カタカナは皮肉を表すのに使われているのではないか。

⑤植物や生物の名前はカタカナで表記されることが多い。

⑥アイヌ語は、口承言語であり、文字を持たないため、その発音を表記するのにカタカナを用いている。

そして、カタカナは外来語とオノマトペに使われると思っていたが、この他にもたくさんの用法があるようだと言っている。これに対して4人からコメントがあったが、どれも、たくさんの事例を挙げてあり、それについてよく調べ、分析していることに感心した上で、以下のようなコメントを残している<sup>vii</sup>。

①たしかにもともとひらがなや漢字で表記する日本語の言葉を、人々の注意や興味を引くためにカタカナで表記することは頻繁にみられる現象だと思う。これは広告だけではなく、歌やドラマのタイトル、製品の名前などにも使われているようだ。日常の言葉をカタカナで表記するのは、人々の創造性の現れではないか。

②文化言語学のクラスで、日本人にとってひらがなが一番「ウチ」の表記で、次がカタカナ、漢字、ローマ字であると習った。だから通常漢字で表記する言葉をカタカナ書きにするのは、言葉をウチに取り込む、「ウチ」化ではないか。

③日本文化は視覚的な文化だと思う。表記法を目的によって変えるのは、視覚的なバリエーションへの嗜好を表しているのではないか。

④カタカナが皮肉に使われることを知らなかった。とても面白い発見だと思う。また、アイヌ民族の存在自体を知らなかった。もっと調べてみたい。

このように、自分の知らなかった発見に対する驚きや興味、また発見とその分析への同意や自分の意見を交換しているのがわかる。アイヌ語のカタカナ表記については、別の学生も調べ、それについて自分なりの分析をブログに載せている。この学生は、基本的には発音を表記するためにカタカナを使用しているわけだが、それは同時にアイヌ独自の民族性と文化を守るというバリア的な意味合いもあるのではと述べている。これに対しては色々な意見がよせられているが、この意見交換をみってみると、単なる表記法のルールについての調査を超えて、文化、民族、アイデンティティーの問題へと発展し、それぞれが深く考えている様子が伺える。

#### 4-2. 教科書の記述についての分析

学習者は2～3人のグループになって、初級日本語の教科書にあるカタカナの使用方の説明について、それが正しいかどうか、もし正しくないなら、それはなぜかについて話し合い、これについてもそれぞれのブログに意見を載せている。これについては、教科書の説明は間違っていないが、比較的シンプルで、実際の使用例はそれだけでは説明しきれないと、全員がほとんど同じような意見を述べている。その理由をまとめてみると、以下のようになる。

①学習者（初級）の日本語能力にあわせて、初級では一般的によく見られるシンプルな使用法を説明するにとどまっているのではないだろうか。

②カタカナの使用法は時代と共に変化／進化しているようなので、教科書で一般化しきれないのではないだろうか。

③カタカナの使用は、使用者の意図、使用目的、対象者など、コンテキストによるところが大きいので、教科書でその使用例を全てカバーすることはできないのではないだろうか。

このように一般的なカタカナ使用法についての説明についてはその正しさを認めただ上で、それだけが全てではなく、教科書というものの性質、限界についてまで考えているのが見受けられる。

#### 4-3. カタカナを用いた（文学）作品

事例2：ブログ名 Izy

カタカナ分析調査と教科書のカタカナ使用法の説明についての分析の後、学習者は実際にカタカナを使って、文学作品作りを試みた。学生の一人は以下のような詩を書いている。

ありますか、いますか

にほんごで「きがあります。」ですね。

でも、  
ちいさいからおおきいまで  
きがセイチョースル。。。。

どうして「イマス」じゃありませんか。

ははきのいちばんうえで  
にっこうをタベマス、  
くうきをスイマス。。。。

どうして「イマス」じゃありませんか。

この詩には、学生C：「とても sad ですね。きがありますよ！！！」や、学生D：「I read loneliness here. Lovable poem いいですね」のように、内容を理解した上で、感動した、自然は生きているなど、作者に賛同するコメントが多くついた。この詩を書いた学生は、カタカナ分析調査を通して、カタカナは外来語だけに使われているのではなく、日本語に起源を持つ言葉でも、使用者がある意図をもって、その言葉を強調する時にも使われることを学んだと書いている。また、この学生は環境問題に興味があり、自然への尊敬の念を込めて、この詩を書いたと述べている。通常の授業で存在文を習ったところで、「います」と「あります」の用法の違いを理解した上で、意図的に木の「行動」をカタカナで表記することにより、自然愛護のメッセージを込めていることがわかる。そして、それを読んだ他の学生達はそのメッセージを受け止め、共感をしめしているといえるだろう。初級の学生でも、限られた文法と語彙、また日本語表記についての知識を使い、自分の意見を文学作品に込めることができることを証明した例ではないだろうか。

事例3：ブログ名 Spring (仮名)

別の学生、Spring はオノマトペを使って、以下のような漫画を書いた。



Spring は、カタカナ使用法の中で、特にオノマトペに興味を持った。日本のポップカルチャーに非常に興味があり、日頃から漫画やアニメをよく読んでいる Spring は、カタカナがオノマトペに使われることは知っていたが、分析調査を通して、さらにオノマトペのうち、擬音語には、単に音を表すだけではなく、作者の意図によって、二重の効果が出る可能性があるのではないかと考えるようになる。擬音語にはそれが使われるコンテキストによって、登場人物の心理や、その場の雰囲気など、何かを強調する効果があるとブログにのせている。そして、自身の漫画の中で、風の音を表す「スウウ」という擬音語と、「バタアーン」と突然に乱暴に机が閉まる音で、これから何かが起こりそうな緊迫感と不気味さ、登場人物の恐れを表そうとしたと述べている。この漫画には、八つのコメントが寄せられているが、ストーリー性、カタカナの使われ方、そして絵のうまさなど、どれも漫画としての質の高さをほめている。そして次回の作品を期待するコメントもあった。そして、これは本稿では考察の対象としてはいないが、作品をおもしろいとしながらも、この作品の中にある言葉や表記の間違いを指摘し、ただコメントもいくつか見られた。教師の指導なしに、学生間での言語使用に関する自主的な学び合いが行われていることの例であると言えよう。

この事例の他にも、それぞれが興味を持ったカタカナ使用法を用いて、俳句、川柳、ショートストーリーなどの作品が作られた。

#### 4-4. プロジェクトに関するアンケート結果

このプロジェクトが行われた秋学期の学期末に、カタカナプロジェクトについてのアンケートを行った。このアンケートでは以下の六つの項目について質問をした。

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>①カタカナプロジェクトで何を学びましたか。</li> <li>②このプロジェクトが好きですか。それはどうしてですか。</li> <li>③このプロジェクトを通して、教科書に対する態度、見方が変わりましたか。</li> </ul> |
|---|



- ④もし自分でカタカナについての説明を教科書に書くとしたら、現存の教科書にあるような書き方をしますか。それとも何か変えたり、詳細を加えたりしますか。
- ⑤このプロジェクトを良くするための示唆やコメントがありますか。
- ⑥このプロジェクトの他に、日本語学習者にとってなにかおもしろいプロジェクトがありますか。

ここではその中で、分析・批判的思考力と創造性に関係がある三つの項目について結果を考察してみたい。

#### 4-4-1. 質問1 このプロジェクトで何を習ったか。

この質問に対する答えは、文化面、言語面、そして学習者自身についての、大きく三つに分けられる。文化面では、文字の歴史、俳句と川柳の違い、アイヌ民族について、ポップカルチャー、マーケティングなどがあつた。言語面では、教科書とは異なるカタカナの使用法を学んだという回答が多かつた。また、カタカナの使用は時代と共に変化しているというものや、カタカナの使用法は、それを使う人の意図、目的、使われる対象者など、使われるコンテキストとの関係が強いという点を挙げた回答も多く見られた。その他、カタカナの文化性、日本語における文字使用の柔軟性と創造性や、言語学の学術的一面について学ぶことができたというものもあつた。三点目の学習者自身については、「学び方について柔軟であるべきだということ学んだ」と、自分の学習スタイルに対する認識について述べている学生がいた。また、日本語における文字使用の複雑さを学んだことにより、文字への意識が高まつたと答えている学生も多かつた。その他に、母国語でも自分には書く能力がないと思っていた詩を、日本語で書けた、自分には文学作品を書く能力があるのだという、自分の能力の発見に対する喜びを述べている学生も何人かいた。

#### 4-4-2. 質問2 このプロジェクトが好きか。それはなぜか。

この質問には、74%の学習者が好きだ、22%の学習者がコメントつきで好きだ、残り4%が好きではないと解答している。まず、好きだと解答した74%をみてみたい。なぜ好きかという理由は、分析・批判的思考に関係しているもの、創造性に関係しているもの、そしてカタカナの知識習得に関係しているものの三つに大きく分けられる。分析・批判的思考に関するものには、「日本語について持っていた基本的な前提を考え直させられた」、「このプロジェクトは日本文化を深く理解するために必要だ」などがあつた。また、「通常の教材は単純なものが多いが、このプロジェクトは大学レベルの研究だ」、「知的好奇心をそそられた」、「日本語の使用法について自分で分析できて楽しかつた」、「オープンエンドのプロジェクトなので、自由に色々なことを試してみることができた」、「通常、言語学や記号学のクラスで学ぶことを外国語のクラスで学べた」などというコメントもみられた。次に、創造性に関するものは、文学作品を作る

ことの楽しさ、喜びを述べている。そして、単純な暗記による学習ではなく、創造的に言語を学べること、また個々の学習者が新しい言語で自己を表現する機会を与えられたことへの喜びも述べている。「日本語を単に知識として学ぶのではなく、それを通して自己表現をしていきたいと思うようになった」と答えている学習者もいた。最後のカタカナについての知識の習得だが、これは教科書に書かれていない用法についても学べたこと、そしてそれが今後自分がカタカナを使用していく上で役に立つと答えている学習者が多かった。また毎日の生活の中で、カタカナを意識するようになったという学習者もいた。次に、好きだと答えつつマイナスのコメントを残した22%の学習者と、また、好きではないとした4%の学習者をみてみたい。どちらにも共通しているのは、時間がかかったと感じている点である。「時間がかかりすぎる」、「時間がかかって大変な割に、成績に反映されるパーセンテージが低い」、「かわりに漢字を勉強したかった」、「言語についてではなく、言語を勉強したかった」などのコメントがみられた<sup>viii</sup>。

4-4-3. 質問3 このプロジェクトを通して、教科書に対する考え方が変わったか。変わったとしたら、どのように変わったか。

大多数が教科書のカタカナ記述は十分ではないと結論している。しかし、これによって教科書に対する考え方が変わったかどうかについては半分半分に別れている。どちらも共通して感じているのは、現実社会での言語使用の全てを教科書ではカバーしきれないという点で、だから教科書では単純化、一般化するのは仕方ないと擁護し、教科書とはもともとそういう性質のものだとするか、もっと現実的な使用法についても記述するべきだと批判するかの違いであった。そして後者の中には、今まで教科書に書いてあることは全て受動的に受け入れてきたが、今回始めて、批判的な視点から見る経験をして、教科書が全てではないということ学んだというコメントも多くあった。

## 5. 考察

本稿では、内容重視の批判的日本語教育を提唱し、その可能性を探るため、ここまではその実践報告をしてきたが、ここで、このプロジェクトがどのように、学習者のクリティカルな視点・姿勢を育成し、同時に言語・知識との統合をはかれたか、前節の学習者のカタカナ分析調査、文学作品、プロジェクトのアンケート結果をもとにみていきたい。

5-1-1. クリティカルな視点・姿勢の育成—当然とされている前提・価値観を考察

教科書のカタカナの説明、実際のカタカナ使用例の分析を通し、学生評価にもあったように、教科書に書かれていることが全てではない、コンテキスト（使い手の意図、使用目的、ジャンル、対象読者など）によって様々な使い方があると学んでいる。今まで受動的に正しいと受け入れていただけの教科書に対して、

批判的な視点を得た学習者も多くいた。また、日本語における文字使用の流動性、文化性を学び、日本語について持っていた前提自体を考え直させられている学習者もいた。この活動を通して、当然と思い込んでいたものへの批判的視点を得たと言っているのではないだろうか。

#### 5-1-2. クリティカルな視点・姿勢の育成--現状（自分、社会、コミュニティの未来）に能動的に関わろうとする態度や視点

学生の作品に現れていたように、自分の興味のあるもの、あるいは伝えたいメッセージを、好きな媒体（詩、俳句、川柳、漫画、ショートショートなど）を使って表現し、それを読んだ側も共感している物が多かった。カタカナを意図的に使い、自分を表現するための手段として言葉を使っていることはここで非常に大事であると考え。またコメントをもらい、自分のいいたいことが伝わっていないことを学んだ場合、相手に伝わるように書き変えているという行為も周りへの働きかけといえるだろう。前述したアンケート結果にもあったように、日本語を自己表現の一つの手段としていきたいという学習者に、まさしくこの態度と視点が確実に培われていると言えるのではないだろうか。

#### 5-1-3. 言語・知識の理解

これも前述のアンケート結果にみられたように、「カタカナの使用法について学ぶという教育目的に加えて、さらに目標言語で自己表現をすることを学んだ」というコメントが代表するように、カタカナの歴史、使用法の変化、カタカナ使用の文化的背景（コンテクスト）などを、教科書分析、カタカナ使用分析調査を通して学び、最終的には、自分で意図してカタカナを選び、創造的に使用するという活動を通し、学生はこの両面での学びを同時に経験していると言えるのではないだろうか。

このように、文字プロジェクトは、言語と知識を学びながら、学習者にクリティカルな視点・姿勢を持つことも学んでもらえる可能性を十分に持っているといえるだろう。

### 6. 教師の役割

本プロジェクトにおいて、教師はどんな役割を担ったのか、ここで述べておきたい。まずは、日程、時間調整、クラス内での時間配分など、プロジェクトの進行を常にモニターする、スケジュールの管理者としての役割があった。次に、何か問題が浮上した時（例えば、集めてきたカタカナの意味がどうしてもわからないなど）、言語的知識、背景になる歴史的情報など、問題解決になるようなヒント、つまり方向性を与えるガイド的役割も果たした。また、学習者の自律学習を促すあまり、目標自体を見失わないように、なぜその活動をしているのかという

目的を学習者が常に念頭に置くようにした。最後に、分析調査と作品を、一評価者として評価し、最終的に成績をつけるという役割を担った。

## 7. 初級に内容重視の批判的日本語教育 (CCBI)を取り入れることの意義

最後に、とかく初級での内容重視の言語教育の限界が唱えられる中、あえて初級で試みることの意義について考えてみたい。

### 7-1. 実用性・現実性の重視

前述したように、このプロジェクトは秋学期に行われたものである。日本語に対する知識も、日本語能力もほとんどゼロの状態での出発し、カタカナの歴史、使用法について学び、最後には文学作品を作るという段階にまで達することができた点、またその作品の質の高さをみる時、それ自体がこの言語と内容学習の統合をはかろうとするプロジェクトの可能性を表しているといえるのではないだろうか。

### 7-2. 自律的な学習者の育成とエンパワメント

学習者達はこのプロジェクトを通して、文字使用への意識が高まり、それが今後の学習に役立つだろうと考えている。また、日本語学習初期の段階から、自分の意見などをブログという媒体を使って周りに伝え、またそれに対するコメントをもらうという、実際のコミュニケーションが行われている。ブログをみると、最初は英語が多かったものが、時間をおって、自主的に日本語に変わっていく様子や、意見交換を通して、だんだん読み手を意識して発信するようになっていく様子などが、ポートフォリオ的に記録として見られる。また、今回は教師からの指示は全くなかったにもかかわらず、学習者間で自主的に間違いの訂正が行われていた。このエラーコレクションも含めた、コメント交換を通してのピアラーニング、学習者間での助け合いも活発に行われていたようだ。教師が支援者としての役割を担うことによって、学習が自分で考え、その答えを分け合い、最終的には日本語を自己実現に使うという過程に達しているのを見ると、自律した学習者としての成長の一步を見ることができる。

## 8. おわりに：内容重視の批判的外国語教育(CCBI)にむけて

本稿では、初級レベルにおいてもCCBIの教育理念、つまり、学習者自身が自分で考え、その内容に責任を持って外へ伝えて行く力、自律した生涯学習者の育成が十分可能であることを示した。ここで最後にもう一度確認したいことは、学習者は、われわれとともに、これからの世界、社会、コミュニティーの未来を、あるいはその先の将来を担っていく人々であり、われわれ教師はそのような人々を育成しているのだということである。したがって、CCBIの教育理念は、「言語」や「内容」を完全にマスターしてからその次に育成すべきスキルのようなも

のではなく、むしろ、「言語」「内容」の学習とともに、学習の当初から学習者とともに培っていくべき大切な姿勢、教育理念であると筆者らは考えている。

#### 謝辞

日本語の文字プロジェクトの企画、運営段階において、さまざまな協力校、提携校の方々に大変お世話になりました。また、本稿の草稿の段階で下の方からコメントをいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。（五十音順、敬称略）

熊谷由理、長谷川敦志、深井美由紀

---

i 2 節は佐藤・長谷川・神吉・熊谷（2011）の佐藤担当分を加筆修正した。

ii 実際に内容が何を指すのかという議論になってくると「学校の科目(academic subject) (Crandall and Tucker 1990)」「学校の科目に限らず、さまざまなトピック、テーマ、学習者にとって興味のある、あるいは重要な事柄（言語でなくてもよい）(Genesee 1994)」「一般のことば、とりわけ学習言語の理解に寄与する知的なトピック(Chaput 1993)」のように定義はかなりまちまちである。このような定義は、おそらく内容と言語を統合しようとするプログラムの特色によって、つまり、内容と言語の連続体 (Met 1991)のどこに、対象とするカリキュラムの現状があり、どの地点を目標として位置づけるかによって、異なってくると考えられるが、本稿では「対象言語・文化だけにとらわれず学習者の知的興味を刺激するような題材(Met 1999)」を用いる。

iii 日本語訳は佐藤によるもの

iv 1 年生は秋学期・春学期と1年を通してブログを使ったプロジェクトを行っており、この文字プロジェクトはその1部として行われた。学習者は各自学期のはじめに各自のブログを作成している。この文字プロジェクトで行われたカタカナの使用例の分析、教科書にあるカタカナについての記述の考察、文学作品の公開、それぞれについての意見交換ならびにコメントは、全てこのブログを通してなされている。成績はプロジェクト全体に8パーセントが与えられ、そのうちわけは、ブログに6パーセント、文字プロジェクトに2パーセントとなっている。

v 学生達が作成した評価カテゴリーは以下の通りである。

#### **1. Emotiveness (Appeal to heart)**

Capture the readers, appeals to the senses, inspire reaction

Thought provoking

Relatable to the reader

#### **2. Delivering message (Message)**

Eternal verities, providing lessons (underlying deeper messages), depth beyond the plot,

---

has a point to it  
Controversial/thought provoking content,  
Star-crossed romance, sense of fantasy (mythos)

### **3. Aesthetic Factors (Beauty)**

Aesthetically pleasing,  
Follows a structure, style, formation of a style and consistency  
Provokes image, songs, and etc, can picture in your head  
Sounds beautiful, should flow, have rhythm, rhythmical

### **4. Creativity (Interest)**

Unique, exciting, interesting, fun, not boring, wit, smart, funny, humorous, entertaining,  
well developed, not repetitive/ cliché, sparking new ideas and questions, original,  
imaginative, innovative, challenging societal conventions, question the typical standards

### **5. Consideration for Others (Ease of Reading)**

Coherent, clear, thoughtful, an appropriate length  
Easy to interpret and/or understand  
Ability to reach wide audiences across ages and cultural backgrounds, potentially carry  
universal values  
Vocabulary that takes into account the audience's level of understanding

### **6. Language (Relation to Language)**

Use of language, meaning either a unique use of diction perhaps  
Well crafted (i.e. - put thought/effort into it, strategic choice of words, etc.)  
Wordplay, fun with language

### **Haiku & Senryu**

Rhythms, rhymes, and catchy sounds  
Correct form and style  
Express an aspect of human nature (Senryu)  
Express an aspect of the natural world (Haiku)

### **Story & Manga**

#### *1) Plot & Structure*

Good, interesting, clear story line  
Depth of character and plot  
Beginning, middle, and end

#### *2) Characters*

Character development, characters that you can relate, memorable characters

<sup>vi</sup> この分析調査結果は全て英語で書かれており、本文ではそれを松井が訳しまとめたものを②～⑥に紹介する。もとの英語で書かれたものは以下の通りである。  
More intriguing is the use of Katakana to represent a foreign accent or robotic speech in Manga comics. Related to this many onomatopoeia, words that represent sounds, are

---

written in Katakana. The reason for this is that it makes the words stand out, which is very useful for effect in Manga comics or in advertising. In advertising Japanese origin words may be written in Katakana to attract a readers or passerby's attention. Used in text the use of Katakana may be used in similarity to quotations to give the word special emphasis. The scientific community in Japan has taken to this use of Katakana is naming new plants and species or choosing titles of new projects as using Kanji may lead to confusion do to the complications in translating a meaning of a word or idea into Kanji. In addition Katakana maybe used in an ironic sense when adding a title such as sensei or san to provide a condescending feeling to the title. [i] In addition to being used to express borrowed words in Japanese, Katakana is also used by the Ainu of Japan to officially write their language[ii], the use of Katakana for this purpose creates some pronunciation problems for Ainu words as Katakana are syllabic blocks. Romanji is also used to overcome this limitation of Katakana.

vii これらのコメントもほとんどが英語で書かれており、ここでも松井が訳しまとめたものを紹介する。

vii プロジェクトに割いたスケジュールと授業時間は以下の通りである。

- |       |  |
|-------|--|
| 10/25 | ・カタカナサンプルの分析<br>グループ（15分）、個人（15分）  |
| 11/10 | ・文学作品評価基準設定 グループ（10分）<br>・文学作品の作成 個人（20分）→11/17 提出<br>・カタカナ分析へのコメントを読みリバイス 個人（15分）<br>→12/1 提出 |
| 11/24 | ・文学作品へのコメントを読みリバイス 個人（15分）→12/1 提出   |
| 12/9  | ・クラスメートの文学作品の評価 個人（25分）<br>・カタカナプロジェクトの評価 個人（15分）  |

参考文献

- 岡崎眸 (2002) 「内容重視の日本語教育」 細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』, 凡人社, pp.49-66.
- 佐藤慎司・長谷川敦志・神吉宇一・熊谷由理 (2011) 内容重視の批判的外国語教育の理論と実践: 未来に視点を向けた日本語教育. アメリカ日本語教師会発表原稿
- Brinton, D., Snow, M., & Wesche, M. (1989). *Content-based second language instruction*. New York: Harper & Row.
- Crandall, J., & Tucker, G. (1990). Content-based language instruction in second and foreign languages. In S. Anivan (Ed.), *Language teaching methodology for the Nineties* (pp. 83-96). Singapore: SEAMEO Regional Language Centre.
- Chaput, P. (1993). Revitalizing the traditional program. In M. Krueger & F. Ryan (Eds.), *Language and content: Discipline- and content-based approaches to languages study* (pp. 148-157). Lexington, MA: D.C. Heath.
- Genesee, F. (1994). *Integrating language and content: Lessons from immersion*. Santa Cruz, CA: National Center for Research on Cultural Diversity and Second Language Learning.
- Met, M. (1991). Learning language through content: Learning content through language. *Foreign Language Annals*, 24, 281-295.
- Stryker, S., & Leaver, B. (Eds.). (1997). *Content-based instruction in foreign language education: Methods and models*. Washington, DC: Georgetown University Press.